手鈎の話あれこれ

沖野奈加志

仲仕といえば、頭に鉢巻、腰に手鈎、地下足袋に脚絆という姿であったのが、運輸労働者といわれる近頃は、ヘルメットに安全靴という姿に変ってしまった。手鈎を使う仕事が殆んどなくなってしまったのだ。

他の仕事、たとえば大工さんは鋸も鉋も電動になり、左官も壁塗りは吹付になり、石工もタガネでコッコッはやらなくなった。

どの仕事の道具をみても、その仕事の歴史と、働く人の知恵がつくりあげたものであることがよくわかる。

大工道具を主として建築用の道具類は、有名な神社、寺院、城などの造設に使われ、また一般に身近に使われたことなどもあって、その道具類は古いものが保存され、記録が残され、多くの文書に表われている。

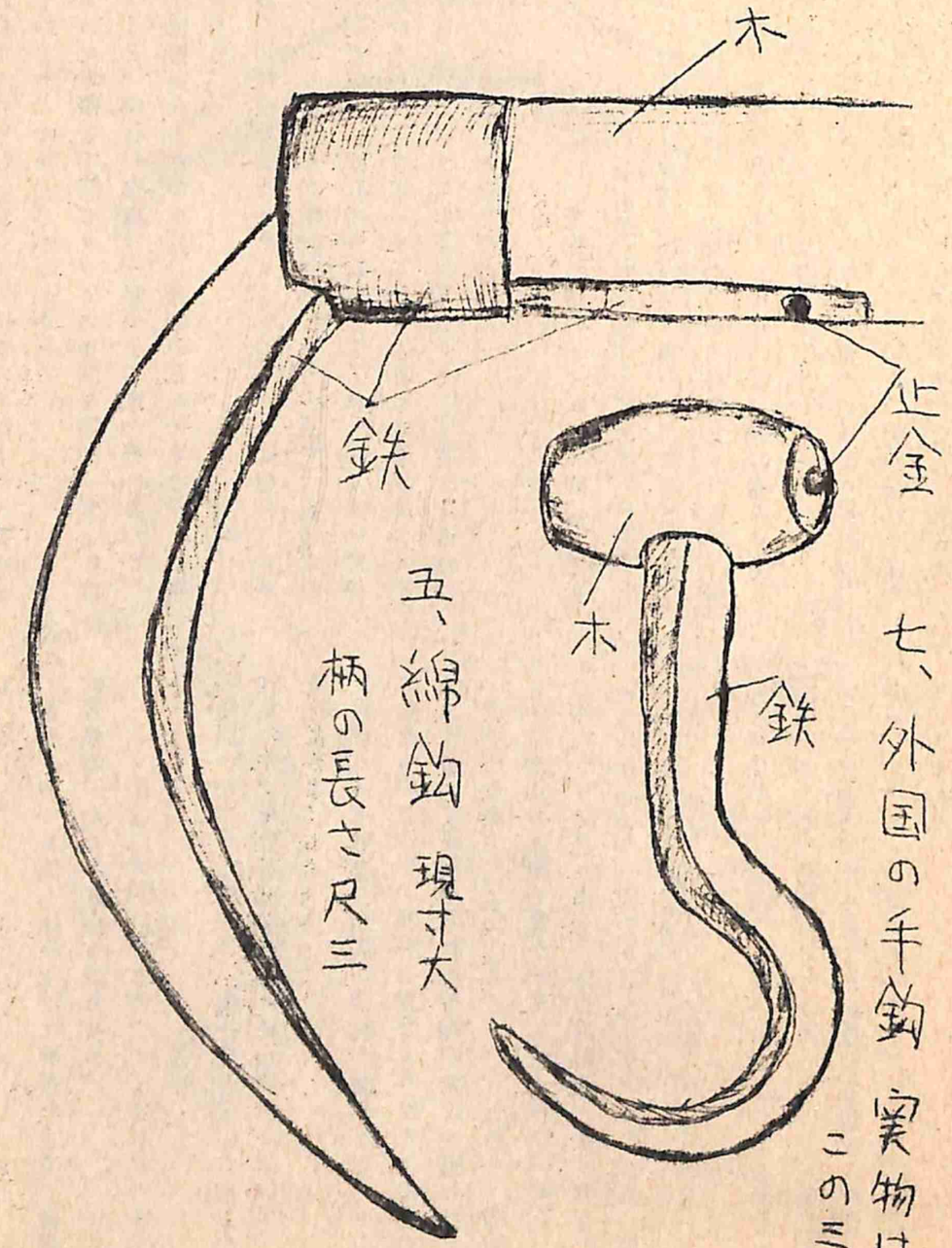
仲仕の使う手鈎については、一般になじみのない道具のせいか、あまり古い記録に出ているのを見かけたことがない。

港で古くから仲仕をしていた人たちにも尋ねてみたが、手鈎の名称一つにしても、どれが正式なものかはっきりしない。今でも片手間に手鈎を売っている店はあるが、そうした店でも、殆んど使わなくなったうちでもまだ細々と使われているものだけ幾種類か置いているだけで、手鈎全般にわたってはわからない。

使う現場、使う土地によって手鈎に限らず、それぞれ名称も違えば、使い方も変るので、ここでは手許に集めてきた手鈎二十数種類と聞き書きによって、手鈎にまつわるあれこれ話としよう。

「米鈎」（図一）その名のとおり米俵の仕事に使うもので、手鈎の元祖のようなものである。

米が大量に輸送されるようになった江戸時代中期頃か



ら使われたものらしいが、その頃からこのように完成されたものであったかどうかはわからない。

かついだ米俵を手鈎でコジてスキ間を開け、米をこぼしてゆくと、仲仕の女房、子供がその米を拾いあつめてゆく話は聞いたことがあり、映画のなかでもそういう風景があった。

築港の沖仲仕を四十年余りつとめて、今は自ら〝クスボリ〟という石やんが米鈎を久しぶりに見て、道産米の荷役の話などなつかしそうに話してくれたが、ふいに何かを思いだしたように「ケンカのときはこないもつんや」と逆手にもって、ブゴの下に刃先をもってきたときは、七十八才とも思えぬ迫力があった。

「ノンコ」（図二）　米鈎は俵のときに使うが、麻袋（外米、豆、麦、コーヒ、種実類）のとき使うのがノンコである。

ノンコの語源はわからない。麻袋のときはなるべく袋の上、下のミシンの縫い目のところに鈎をかけるか、袋の横で使うときは下の方にかけないと、袋の重みや腐りで袋が破れて、ときには自分の足か手か、相棒のあるときは相手の顔などにひっかき傷を負わせることがある。

はしけの上で棉実袋をならしていて、袋が破れ、後向けに海へはまり、ヘドロの中に首をつっこんで死んだ人もいる。

倉庫の中でも高く積み上げた麻袋の上で、破袋による転落事故がよくおきたものである。

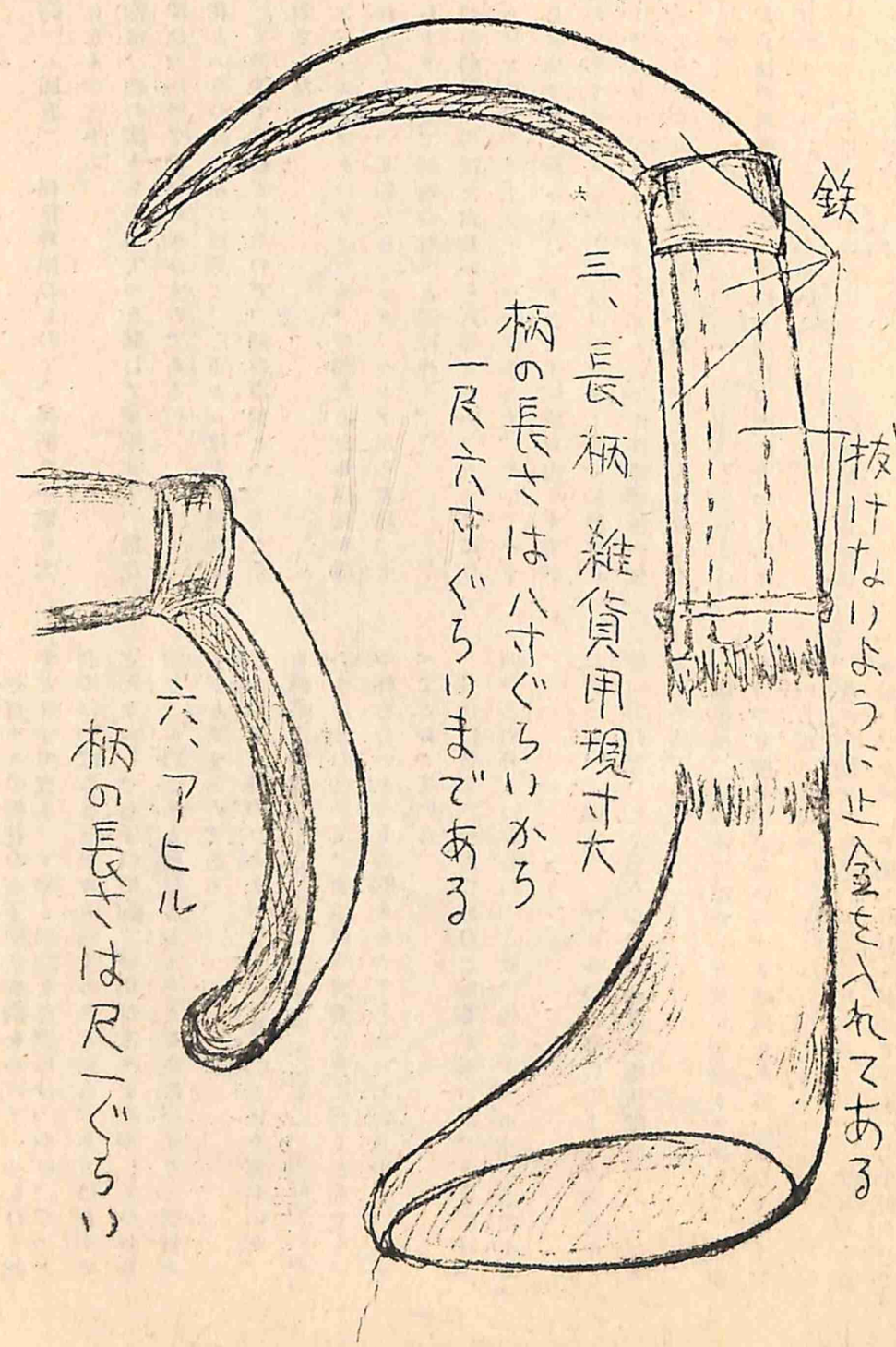
ノンコにも二本刃、三本刃、ごくまれに一本刃がある。

「長柄」ながえ（図三）　現在でも使用されることの多いもので、雑貨用として用途が一番多いもので、手鈎の主流である。

長柄というのは、米鈎が手鈎の源流なら、その柄を長くしたものだから、長柄と言うようになったものだが、用途によって考え出された手鈎の変化の表われだろう。

長柄にも尺二（一尺二寸）とか、尺三とか、箱鈎という中央市場の魚屋で見かける二尺ぐらいのから、七寸位の短いのまで色々あり、魚を直にひっかけるものは魚をいためないよう、刃先が細く小さいものまで、用途によって幾種類もある。

「ジョリキ」（図四）　使い方から見ると助力とでも書くのだろうか、語源ははっきりしない。（図二）のノンコの柄を長くしたもので、用途は麻袋のとき使うものである。片手にノンコ、片手にジョリキという使い方をするときもある。



「棉鈎」（図五）　棉花専用のもので、長柄を一廻り大きくしたものである。

棉鈎は、他の鈎とちがってつき刺して使用せず、棉花の角にひっかけて荷物を動かすのである。

棉花というのは、綿の原料で、三百キロほどの棉花を圧縮して帯鉄で締めてあるので、綿の原料といっても手鈎が刺さらない。

インド、エジプト、アメリカ、中国などから原綿が輸入されてくると、本船からハシケ、ハシケから倉庫、それからトラックで紡績会社へと運ばれる。

本船の船艙で棉花を六個から八個ぐらい、ロープにかけてウインチでつり上げ、ハシケにおろす。そしてハシケから倉庫で高く積み上げ、トラックに積み出すまでが仲仕の仕事であったが、最近はコンテナー詰で船積され、フォークリフト、サイドクランプといった荷役機械が使われるようになり、棉鈎を使う仕事もだんだん少なくなってきた。

住友倉庫の築港南岸に、下請で棉花専門にやってゐた〝棉花のミシマ〟という男がいた。

彼が扱うと三百キロが勝手におどり廻っているかと思うほど軽々と動き廻るのである。

三百キロの棉花の右下隅に棉鈎をかけて、少しひき起すと左手で支え、す早く棉鈎を左横にひっかけ、ぐっと右にひっぱると三百キロがくるりと廻る。あとは左手で支えながら、右手の棉鈎で棉花の重みを利用してひねり廻し、ころころと廻しておもうところにぴたりと三百キロがおさまるのである。

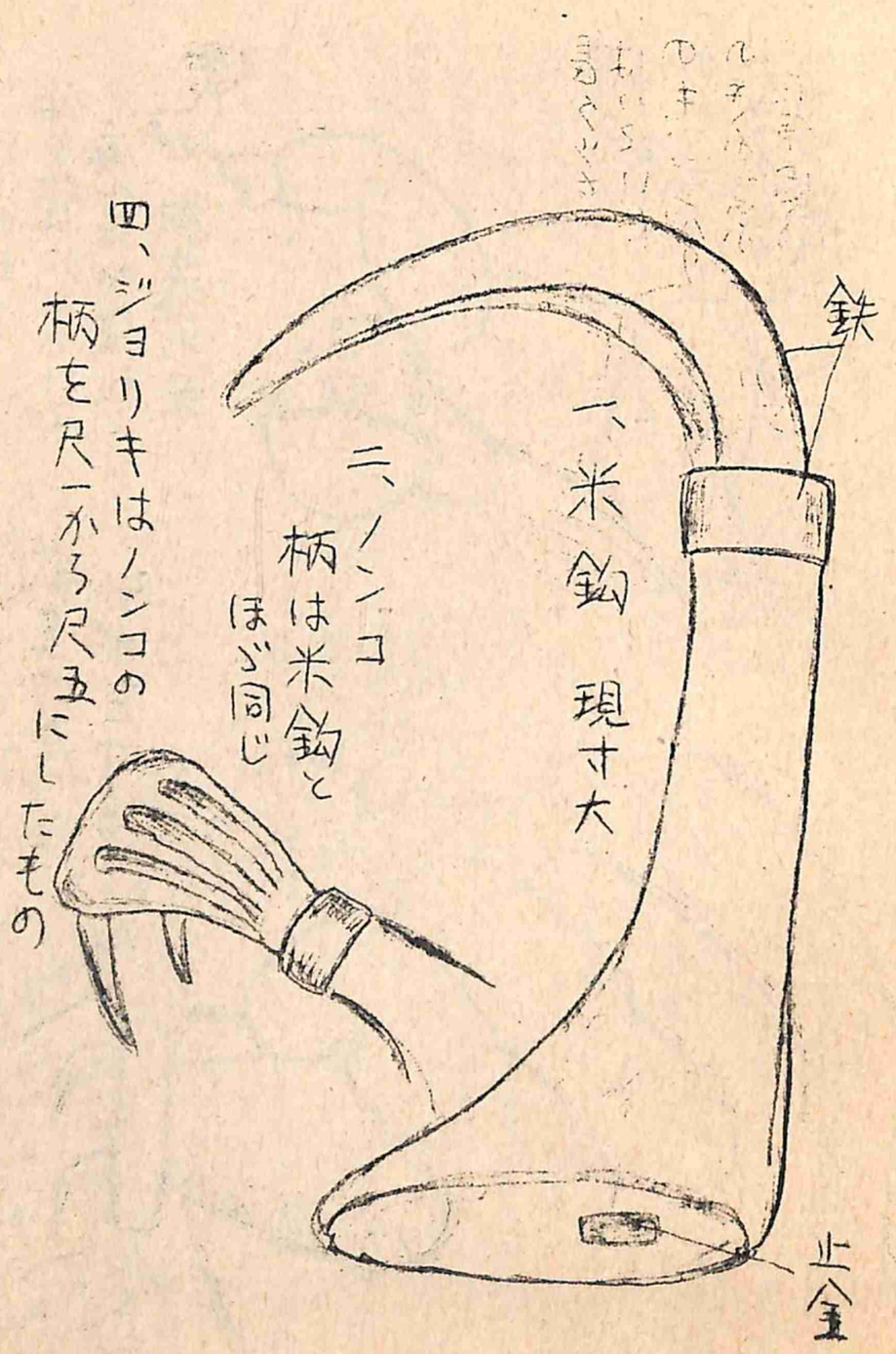
本船にも棉のワタナベ（本当は渡辺）という男がいた。自称柔道何段（話す相手によって段が違う）、力は強いが、力まかせの仕事で、新世界へ映画を見に行くときでも、一杯呑むときでも棉鈎をもってあるいていたので、棉ナベでとおっていた。

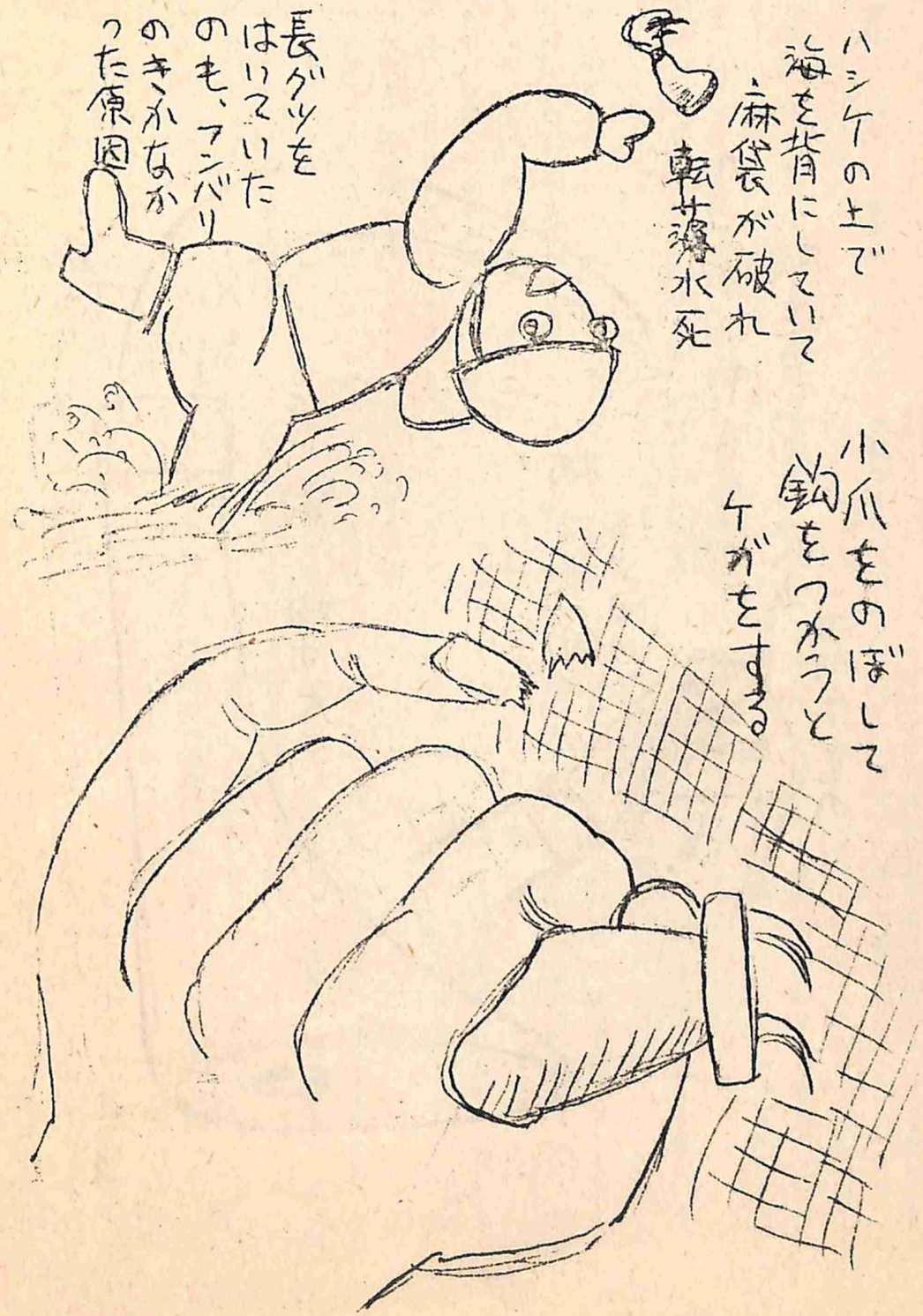
仲仕は仕事六分に口四分と能書が多いが、ときには「四分と六分もいるわい」とは、先のクスボリの話である。

「アヒル」（図六）　アヒルの口ばしのような刃先をしているので、こう言うが、用途は、塩漬獣皮、パルプなどである。

塩皮は、屠殺場ではがした皮に岩塩をまぶして、一頭分づつを座布団ぐらいの大きさにたたみ、麻ひもで十文字にしばってある。

皮に手鈎をうち込むと皮に穴があくので、アヒルを使うが、つき刺して使うのとちがって正味の力を使うので、





しんどい仕事である。この仕事も今はコンテナー詰になってくるので、殆んどなくなってしまった。

パルプのときも製紙原料の高さ四〇センチで、五〇センチ角ぐらいの二〇〇キロのものを針金で井型に締めてあるが、これも今は八個づつ帯鉄で締めてくるので、手鈎を使う仕事はなくなった。

「外国の手鈎」（図七）　木箱やダンボールケースの荷物に手カギ無用と表示してあるのを見かけます。輸出（？）用荷物には、手鈎の図に×印がつけてある。字の読めない人にもわかるようにしてあるのだが、この図に使われている手鈎はオーストラリア、アフリカなどで使われているようで、この図のものは、アフリカ航路の荷物のなかでみかけたものです。

▽御握り屋情報△

賃金未払常習飯場と賃金未収常習アンコ

「えらいめにあうため」とは久しぶりに顔を見せた常連のAさん。

東大阪の飯場に行ったのだが三日目の朝、札を見て車に乗ったはずなのに、現場で「お所ここちゃうぞ」。ゴタゴタいうのでいやけがさし、その場から飯場へ帰り、「おしぼりとってもらいきすわ」で、ケッワリ。二日分の賃金はもらゆずじまい。

「そりゃ、えらい飯場やで、事務所には、麦に山の代紋が飾ってあるし、トンコは毎日や、満期で帰るのはあらんのとちがうか。それで、その飯場では満期以外は金もらうん、いうてたわ。」

しばらく話しているうちに、「普通の会社へ勤めて定年まであらずに中途退職しても金はくれるわな。アンコはあかん、いうこと方いやろ、そや、今日も手配師来てたから、もろうてこ」

結果は、手配師は「そんなんセコイ」言うて行け」、センターからこを話してもらって日時を決め、金を取りに行っても、「今、係のもんいてへん、外で待って」、安心した四時間待てという。再びセコイ「受基所つ手続きするわ、そやけど、金とりるかどうかわかれへんで」

「こんなにメンドくさいトンコ、たなりにアキラめる奴が多いんやな、そやけど、騙ってたらアンコ友められるばっかりや、やっぱりキッチリ金取ンこな。」Aさん、またまたセンターへ。

東大阪のフジタ組　要注意！